

ふくやま文学館友の会だより

第24号



2024年（令和6年）12月20日発行

〒720-0061
広島県福山市丸之内1-9-9
ふくやま文学館友の会事務局
TEL (084) 932-7010
FAX (084) 932-7020

広島 頼山陽史跡資料館を訪ねて

安原敬太郎

文学探訪で、平和公園近くにある「頼山陽史跡資料館」を訪れた。こ
こは、父春水の藩邸があった場所
で、庭に入ると「山陽の座像」があり、
被爆樹のクロガネモチも元気に茂っ
ていた。この庭には、二十一歳で脱
藩騒動を起こし、五年間幽閉された
「頼山陽居室（仁室）」と呼ばれる
建物（八畳と六・五畳）が復元され
ている。この前で、若き破天荒な山
陽を偲んで記念写真を撮った。

父春水は、脱藩した息子を藩には
ばかり、「座敷牢」に入れることに
した。その間、山陽は歴史書や軍記
物を読みまくり、「日本外史」の草
稿をまとめた。その後もライフワ
ークとして完成まで書き続けた。「座
敷牢」が山陽の才能開花をもたらせ
た。資料館には、山陽に関する文献
や資料が、所狭しと展示されていた。
（学芸員さんの話と展示物の説明）

頼山陽は大阪で生れ、広島城内の
袋町の屋敷で育った。父はほとんど
江戸住みで、十四歳の頃までは母
「梅颯」（静）の手一つで育てられ
た。五十九年にわたる「梅颯日記」
が残っており（山陽の成長、和歌や
趣味など）山陽には甘い母親だった。
「日本外史」の原本を見せてもら
い驚いた。二十二巻すべて漢文で書

かれていた。武士のドラマを紹介し
ていくのは、漢文の方が歯切れが良
い。合戦のようすなど、スポーツの
試合の実況のように書かれていると
言われている。

詩吟で有名な「川中島の合戦」や
「本能寺」なども、山陽が得意とし
た歴史故事に関する作品で、人物へ
の思い入れを力強く詠んでいる。

日本外史は朱子学が説く尊王を骨
子に、武士の興亡史を物語風に書き、
多くの読者を得て大ベストセラーに
なったと云われている。

老中松平定信に献上、一八二七年
四十七歳だった。

過「頼山陽史跡資料館」 安原

遊学京都脱藩

幽閉家敷開花源

卅年歳月廿巻筆

外史完成血涙痕

起句 21歳の時、京都へ脱藩連れもど
される

承句 幽閉中、歴史書など読み、開花
の源となる

転句 30年の歳月、22巻の外史をまと
める

結句 外史は、苦心、血涙の痕が残っ
ている

山陽は座敷牢から出されたが、父
春水にとって手にあまる息子だった。
三十歳の時、親友菅茶山の好意に
より、備後神辺の廉塾に迎えられ、
塾頭になった。しかし「学問は三都
（京・江戸・大阪）で磨かなければ

役に立たない。」と茶山に書面で訴
え続けた。茶山も上京を認めた。一
年二ヵ月後神辺を去った。廉塾の壁
には、
「山水凡 先生頑、弟子愚」と落書を
残した。けれど、山陽は茶山を尊敬
し、書簡において礼を尽くしていた。
「茶山先生は、当世第一の詩人（漢
詩）だ。」
茶山も「山陽の文章は無双（並ぶ者の
ないこと）だ。」
文政七年、山陽（45歳）帰京の時、
茶山（77歳）を訪問し語り合う。別
れに丁谷の観梅、別離の杯を交わし
た時の漢詩が神辺公民館前の石碑に
ある。



送者は路を停め 客は頻りに顧る
梅花香裏 夕陽傾く

頼山陽史跡資料館の魅力

頼山陽資料館主任学芸員 花本哲志

頼山陽史跡資料館は広島市中区袋町に所在する。ここはかつて、江戸時代後期の広島藩儒頼春水（頼山陽の父）が藩から拝領した屋敷地であった。広島頼家は三代（春水・聿庵・誠軒）にわたって広島藩学問所教授を務め、この地で明治維新を迎えた。その後、その屋敷地は財団法人頼山陽先生遺蹟顕彰会の所有となり、昭和十年（一九三五）に山陽記念館が建てられた。山陽記念館は昭和二十年の原爆投下により被害を受けたものの全壊は免れ、戦後は広島県の所有となった。その後、建物の老朽化によって取り壊されることとなり、新たに建てられたのが現在の頼山陽史跡資料館である。平成七年（一九九五）に開館し、来年三十周年を迎える。平成二十七年には広島県立歴史博物館分館としてリニューアルオープンし、現在に至っている。

当館の収蔵品は、頼春水に始まる広島藩儒頼家に伝来した古文書や典籍などの歴史資料（杉の木資料と呼ばれる）が中心であり、この度、その一部が「広島頼家関係資料」として国の重要文化財に指定された。その他に、各方面から寄贈寄託された書画類を数多く収蔵している。

頼山陽史跡資料館では年に六〜七回展示替えを行い、毎回テーマを決めて展示を行っている。古文書や絵図、典籍類といった歴史資料だけで展示を作り続けることは難しく、近世の書画作品を紹介することが多い。頼家は「学者の家」であったが、多くの能書家を輩出した「書の家」でもある。中でも頼山陽は特に人気が高く、その遺墨に今では考えられないような高値が付いた時代もあった。書作品はとかく「どう書かれているか」に意識が向きがちで、筆遣いや余白の取り方にばかりに気を取られてしまう。しかし、書作品は「絵画」ではない。それは文字を素材に言葉を紡いだ「文学」にほかならない。文字の造形美を味わいつつ言葉に

向き合い、「何が書かれているか」を理解しなければ、作品の本質を理解することはできない。書芸と文芸は表裏一体であり、書作品は文学作品である。詩は「書かれる」ことによって完結し、初めて他者に届けられる。頼山陽の書は、その大半が自ら作った漢詩を書いた「自詠自書」である。ただ残念ながら、その作品は行草書で書かれており、スラスラとは読めない。ましてや書かれてある漢詩をその場ですぐに解釈することは不可能であるといつてよい。そうしたこともあって、当館の展示では、書作品に解説文と釈文（くずし字を活字化したもの）に書き下し現代語訳を記したパネルを付けて展示している。ただ、ややもするとパネルにばかり意識が向いてしまい、作品の印象が薄れてしまう恐れもある。何とも悩ましいかぎりである。漢詩や書は、難しいもの、わからないもの、として敬遠される方が多い。書の見方や味わい方は誰も教えてはくれない。まずは筆がどう運ばれているか、その軌跡を空書き（空中で字を書くこと）してみてもいいだろうか。そのうえで書き下した言葉を声に出して音読してみたい。その韻（響き）を掴みながら改めて書作品を観ていただくと、きっと新たな発見があるはずである。



鱒三忌に参加して 山椒魚をよむ

井伏作品『山椒魚』を知ったのは、子供の教科
澤田喜代恵

書でした。
「なんで、こんなグロテスクな生きものを作品の題材にしたのかネー」
「ほんにネー」

それから、しばらくして文学館の研修旅行で作者の生家・加茂の里を訪ねる機会を得ました。高台の家から谷川を見下した時、作者は幼少期にこの谷川で遊び、ふなやどじょうを追いまわし、その中には山椒魚もいたのでは、と想像しました。また、福山の中学生時代、校内の池の山椒魚にカエルをつかまえては与え、山椒魚をじっと観察していたのではと。

作者はあの高台から谷川の流れを眺め、少年の夢、画家への想いを膨らませていたのではと思う。あの岩屋の穴の山椒魚が外へ飛び出ようところをみる姿と重ねてしまう。小蝦や蛙、水すましとのかかわり、細かい写実的な表現は、岩屋をのぞいているように引きこまれ笑ってしまう。ユーモラスに表現されているが、作者の意図するところは深く、山椒魚の悲しみを痛みを手に取るように感じつつ、それは「いとおいさ」さえ思い、人間の営みと重ねている井伏作品の深さ、すばらしさを読み本をとじました。



今年度新しい講演会・友の会主催について

演題 友の会会長 杉之原寿美子
「広島県における中村憲吉・斎藤茂吉・土屋文明の交わり」
講師 藤原 勇次（現代歌人協会会員）

演題 一二〇〇年間日本で育まれた和歌（短歌）という文学が脈々と続いています。その特性を研究し心打つ短歌に昇華したことは日本の文学において特記すべきことだと感じました。

演題 「島唄から学ぶ琉球・沖縄の歴史と文化」

講師 関 洋（琉球民謡協会 師範）

沖縄が本土復帰しても我々はその苦難の道のりに無関心です。これよりもっと深く沖縄の歴史と文化を知らなければならぬと思います。

木下夕爾賞表彰式

たくさんの応募の中から特選に選ばれた小学校低学年の「一学きの先生」など素晴らしい作品ばかりでした。優秀賞に選ばれた小学校低学年高学年、中学生などの作品が第二十三回木下夕爾賞入賞詩集として刊行されています。



ふくやま文学館友の会の語らいが聞こえる

文学館開設企画委員 小川喜代光

一九九四（平成六）年十一月に実施した、福山市名譽市民井伏鱒二追悼一周年事業で招待した大江健三郎さんは、「井伏鱒二の世界」展の図録に、つぎのように書いています。

「井伏鱒二は二十世紀の中で、おそらく最大の作家です。しかも偉い人として高い所にたてまつられる、というのは似合わない。不思議な人間的魅力を備えている作家でした。（中略）井伏鱒二は子供でもその世界になじむことができる。しかも、それは青年になり、また中年、老年になっても新しい感興とともに読みつづけることのできる世界である。」

福山市は井伏文学の故郷で、井伏鱒二先生を顕彰するために建設された「ふくやま文学館」は、市民レベルで福山の文学館活動を支える「友の会活動」とともに、建設の意義目的に向かって堅実な歩みを続けています。

二〇二一年五月三十一日発行された友の会創立二十周年記念誌は、井伏鱒二先生の名著短編「山椒魚」の名前を載いて誕生し、その活動はあの岩

穴から既に外を覗いて見ることができるようになりました。さらに岩屋内には、会員の皆さんから寄せられた沢山の文学館活動の記録が、山椒魚の卵のように積み上げられています。そして既に成長しつつ歩んでいる友の会活動は岩穴から出て、新たな素晴らしい文学文化活動を展開しています。ふくやま文学館建設開館を福山地域文化振興の行政課題の一つとして計画され、完成した喜びを全身に漲らせて、開館式でご挨拶された故三好章市長の姿が思い出されます。

ふくやま文学館ではその主体的活動として、井伏家からご寄贈いただいた沢山の井伏鱒二先生の文学作品、特に「黒い雨」の原稿をはじめとして貴重な遺品資料を収蔵しています。それらの全てを生かして、人間井伏鱒二の全生涯を語る文学活動を展開し、広く地域の文化文学活動の啓発発展に尽力しています。

文学館友の会活動は文学館建設基本構想に就いて、その柱は井伏鱒二を核として、同時に福原麟太郎・小山祐士・木下夕爾、この三氏に重点を置き、そしてその活動の範囲は福山市を中心に備後全域、及び備後に隣接する安芸・備中圏域も対象として、その地域に縁の文学者を顕彰しています。さらに、そのような文学活動をすすめるながら、地域の豊穠な原野を飛び交う人間模様を、新しい文学創造の息吹で覆い、心豊かな人間社会の到来を夢見ることができるよう文学活動を展開して参ります。ふくやま文学館に集う友の会会員の皆さんの活動には、山椒魚に負けない努力が漲り、明日の文学活動の発展が約束されています。ふくやま文学館友の会万歳。



さぬきの寝釈迦さま

土屋純子

この春、四国の讃岐法然寺、寝釈迦像を訪ねた。初めて訪ねる寝釈迦像に想像を、私なりにふくら

ませていた。それも師のうたに会っていったからだ。

ひるやかに寝釈迦のおはす堂のうへ
暈はなやかに満月懸る

この一首は、「冬の稲妻」の作者の歌集のなかにあり、堂内に、やや暗く横たわる釈迦像と、暈をまとって天空にけぶる大きな満月との照応をうたに詠んだ。まことにまどかで、まさに浄福の時が充ちていくかのように思える。

「冬の稲妻」の歌集は、はなやぎと、悲しみと、祈り、とが分かちがたく重なりあつて、一首々々に輝いていると、序にも記されている。

私は、師のうたを読むにつけ、慰められ、心が浄化され、そしてすこしずつ勇気づけられてきた。今回さぬきの寝釈迦さまを訪ねて、極楽浄土をこの世に描いた先人の信仰心、初代高松藩主の描いた夢が、いまも生きづいていて、四国讃岐に眠り続けていると感じた。寝釈迦と鳥獣人物五十二種の立体涅槃群像のスケールの大きさ、壮観さに、信仰心のうすい私の心のなかにも、ずしんと重いものを感じた。

そして、心が洗われた思いで、法然寺の寝釈迦さまにおもわず掌をあわせていた。



詩歌あれこれ

俳句

花終へし濃きマロニエに笑むピカソ
夏秋のしなやかにのお文学館

奥山 清美



菜の花の揺れて仲良くなつてゆく
消しゴムで消せぬ古傷狐花

塚本 みや子



春耕の音鳴り響く里の午後
高齢化菖蒲哀し平家谷

松尾里子(竜胆)



鱒二忌に「黒い雨」読む夕方

小田 淑子

雨に打たれるドクダミの花
釣り人の像は釣竿高くもち

福山駅前処暑の陽を浴び

土屋 純子

―源氏物語の須磨明石を訪ねて―
須磨寺に吹かぬ笛の音聞こゆるよ

敦盛の笛展示されをり

明石の君へと光源氏の夜な夜な通ひし

鳶の細道今も残れり

日 石 輝子

朝ごとに飲む五個の薬忘れまじ
お蔭で夫は生かされている

草を刈り整地し友の建てし家

赤飯炊きとお呼ばれにゆく



命

安達 道子(一瀉千里)

虹色の背中を光らせた

太ったトカゲが

目の前を走り抜けた

酷暑の夏 人間は疲弊しているというのに

地球の西の方では

いつもで戦いが続くのだろう

丸い地球が どんどん欠けていくのを

見るのは つらい

大きなトカゲのあとを

小さなトカゲが追いかけてゆく

彼らは何も知らない

命をキラキラ輝かせている



二〇二四年四月～二〇二五年三月
「友の会活動内容」(文学館行事一部含む)

一、友の会だより(第二十四号)発行

二、総会・講演会

日時 四月二十日(土)

演題 「NHK大河ドラマ『光る君へ』のリアルと大うそ」

講師 落 健一(元広島大学付属福山高高等学校副校長・福山市北部市民大学講師)

三、第二十二回友の会文学探訪研修旅行

日時 六月二日(日)

内容 広島探訪「広島：平和への祈りをこめて」ひろしま美術館鑑賞・鈴木三重吉の文学碑・原爆ドーム見学・ひろしま八雲で食事・エディオンピースウィング広島サッカースタジアム散策・頼山陽史跡資料館見学・童謡詩人武内俊子生家浄念寺内歌碑見学

四、井伏鱒二没後三十二年鱒二忌(文学館と共催)

日時 七月六日(土)

演題 「鱒二忌に寄せて ―在所言葉と東京言葉―」

講師 岩崎文人(広島大学名誉教授・当館館長)

朗読 「虹」による 井伏鱒二著「山椒魚」

「半生記」を読む

講演会(友の会主催)

日時 九月二十二日(日)

演題 「広島県における中村憲吉・斎藤茂吉・土屋文明の交わり」

講師 藤原勇次(現代歌人協会・日本歌人クラブ会員・搭会員役員・元高校教師)

日時 十月十三日(日)

演題 「島唄から学ぶ琉球・沖縄の歴史と文化」

講師 関 洋(琉球民謡協会 師範)

講演会(文学館主催)

日時 十月二十日(日)

演題 「GHQ/SCAP占領期の木下夕爾」

講師 岩崎文人(広島大学名誉教授・当館館長)

日時 十一月四日(月)

演題 「木下夕爾、詩と俳句を両輪にして」

講師 九里順子(宮城学院女子大学名誉教授)

第十回「文学講演会」(友の会主催)

日時 十一月三十日(土)

演題 阿川佐和子『ばあさんは15歳』を読む

講師 岩崎文人(広島大学名誉教授・当館館長)

第十回「文学講座」(友の会主催)

日時 一月二十五日(土)

演題 「翻訳文学と福原麟太郎」

講師 岩崎文人(広島大学名誉教授・当館館長)

朗読 「虹」による「福原麟太郎の随筆を読む」

特別企画展(文学館主催)

ふくやま文学館開館二十五周年記念

「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂へようこそ」

日時 四月十九日(金)～六月二十三日(日)

「生誕百年 木下夕爾 詩と俳句」

日時 九月十三日(金)～十一月二十四日(日)

「生誕百三十年 福原麟太郎 翻訳の世界」

日時 十二月二十日(金)～三月二日(日)

二〇二四年度文学講座(文学館主催)

芥川賞・直木賞・本屋大賞受賞作品を読む

第一回 日時 二〇二五年二月二十二日(土)

講師 岩崎文人(ふくやま文学館館長)

第二回 日時 二〇二五年三月一日(土)

講師 前田貞昭(兵庫教育大学名誉教授)

第三回 日時 二〇二五年三月十六日(日)

講師 綾目広治(ノートルダム清心女子大学名誉教授)

編集を終えて

編集委員・杉之原・土屋・永久・藤井・村上
二〇二四年は「選挙の年」と言われ、世界は激動しています。皆様には平和を願いながら、毎日の生活を積み重ねておられることと存じます。
文学館友の会は四月から総会、研修旅行、鱒二忌、講演会三つと活動を続け、この度「友の会だより」第二十四号が完成しました。皆様のご寄稿、ご協力ありがとうございました。今後ともご意見等をお寄せくださいますようお願いいたします。